

中川弘子

おろし金で根菜をつぎつぎにすり下ろしているときの感触を「強く根を張る力感じて」というフレーズで表現した感覚のよさに感心した。余談だが、この三種をすり下ろして何を作るのだろう。山芋と蓮根を揚げて、大根おろしは天つゆにいれるのだろうか。

金の輪を鳴らして首長族の娘が首振るとおき金融緩和へ
大野道夫

日本銀行が積極的に金融緩和に乗り出した。そんな時事ネタを作品化した一首。首長族の女性が首につける金色のリングという意外なイメージで、金融緩和が国民の幸福へつながるといふ、遠くおぼつかない道筋を暗示した工夫が見どころ。首長族とは、ミヤンマー、タイに暮らすカヤン族のことだという。

振袖の子の遺影抱き肩幅を泣きつくす姉 喪章かたむく
花美月

「振袖の子の遺影抱き」、さらには「肩幅を泣きつくす姉」、ともに簡潔でしかもインパクトのあるフレーズで、読者は心に明瞭なイメージを結ぶことができる。ただ結局は、いかが。

枕辺にわが笛へ姿しを毎夜置き夢に見ている博雅
原尚美

「博雅」は平安中期の貴族で、笛、箏、築等の名手として知られる雅楽の名手。枕辺の笛の力で、あこがれの人物を夢に引き寄せているのだ。「博雅三位」というイン

パクトのある固有名詞をうまく生かしている。今月の作は「この音でなくてはならぬ ぬばたまの今宵黄泉への扉を開く」など、笛を演奏する歌があつて注目した。

存分に泣いて映画を観終われば小さなあかりが心に
鈴木陽美

最初から読み進んで行き結句にいたつてふつと奇妙な気分になる。二度、三度読んでも、奇妙な気分を味わう。映画が終わると館内がともるわけなのに、結句で、ともるのは心だと明かされるからだろう。

いちテンポ遅れて開く雨傘のこわばり方が好きになりたり
中西由起子

「こわばり」という語が利いているようだ。時代遅れの頑固さのような人間くさいイメージが、この語によって暗示されているようだ。「いちテンポ」は「ワンテンポ」がふつつか。

降り過ぎる雪に文句をいながら鬼の心で除雪機を
押す
高辻郷子

今年の北海道の雪は凄かったらしい。上句の口語的日常的な表現と、下句の「鬼の心で」という素朴な比喩がマッチして、目線の低い一首に仕上がっている。

たをやかに「心の花」の女人歌詠みて逝きにき鳥居
かほるさん
後藤秀彦

二月に逝去された鳥居かほるさんへの挽歌。「心の花」の先輩の逝去を、短歌とのかかわりだけにしぼって表現することによって、筋の通った挽歌にしている。